

牛群検定通信 No136

～ 暑熱期飼養管理の注意点（２） ～

梅雨が明け、猛暑が襲ってきています。そこで、今回は暑熱期に乾乳期を迎える牛の注意点について考えてみます。

乾乳期の目的は次の分娩に向けて準備をすることです。子牛が過大子にならないようにしたり、分娩時に乳房が張りすぎないようにしたり、分娩後しっかり飼料が摂取できるようにルーメンを大きくしたりすることなどがあります。また、前産で乳量の多かった牛で種付けも良かった牛は、体を削っていますので、その回復に努めなければなりません。

このように乾乳期の管理は非常に重要で行わなければならないことも多く、通常の季節においても細心の注意を払って遂行しなければならないのですが、暑熱期には暑さというストレスが加わりますので、乾乳期を順調に乗り切ることが難しくなり、分娩時に事故が多くなったり、分娩後の立ち上がりがうまくいかないことが多くなり、更に、繁殖成績も悪くなったりします。ですから、暑熱期に乾乳期を迎える秋生みの牛は、通常より多くの問題点を抱えていることになります。

では、暑熱期に乾乳期を迎える牛達の対処方法はどうしたらよいのでしょうか。乾乳期には目的がいろいろあると述べましたが、暑熱の影響で目的が達成できない項目もあります。それはルーメンを大きくすることです。ルーメンを大きくするためには粗飼料をしっかりと摂取させ大きくするのですが、粗飼料を多く摂取すると発熱量が多くなり、暑熱の影響が更に大きくなります。牛もそのことを承知していますので、夏場は粗飼料を余り摂取しません。ですから、暑熱期に乾乳期を迎えている牛はルーメンを大きくすることができず、秋生みの牛はルーメンが余り大きくないということになります。ということは、分娩後の飼養管理を通常と同じようにしていると、ルーメンが大きくなっていない分、飼料摂取量が低下し、乳量に対する栄養不足が著しいことになります。

また、暑熱期に飼料摂取量を低下させる要因として、カルシウム不足があります。カルシウムは暑熱のストレスの影響で吸収率が大きく低下しますし、分娩時には生理的に低下し、分娩後二日間は非常に低い状態になり、飼料摂取量も低下します。

このようにして分娩後の栄養不足は起こりますが、栄養不足を起こさないためには、栄養摂取が限られている場合は出ていく栄養を減らすしか方法はありません。特に、カルシウムが回復するまでの分娩後二日間は極力搾乳量を抑えることが重要です。搾乳量が少ないと必要栄養量が少なくてすみ、栄養不足も低減されます。

また、分娩後二日間を乗り切ったとしても、秋生みの牛はルーメンができていませんので、飼料摂取量が徐々にしか増えていきませんので、三日目に搾り切りをするのではなく、昔のように日にちをかけ、ゆっくり行うことが栄養不足を招かないコツになります。

このように、暑熱期に乾乳期を迎える牛は、従来の考え方を変え、柔軟に対処することが求められます。